致道博物館 記念特別展 第4部

藩祖 酒井 忠勝 ③

酒井家庄内入部400年

元和8（1622）年10月、酒井忠勝（ただかつ）は初めて庄内へ足を踏み入れます。

まず取りかかったのは、藩庁と定めた鶴ヶ岡城の整備でした。入部当初は本丸が粗末な造りであったため、城内に住める状況にありませんでした。藩主の居城であり政庁である本丸御殿、そして家臣たちが住む屋敷の建設は急を要したため、初期になり松ヶ岡開墾場の本陣建物）として移築・利用されました。

このように忠勝は入部後、

統治、城郭の整備 大忙し

家中（上・中級武士）・給人（下級武士）を問わず総出で昼夜普請を行ったといいます。

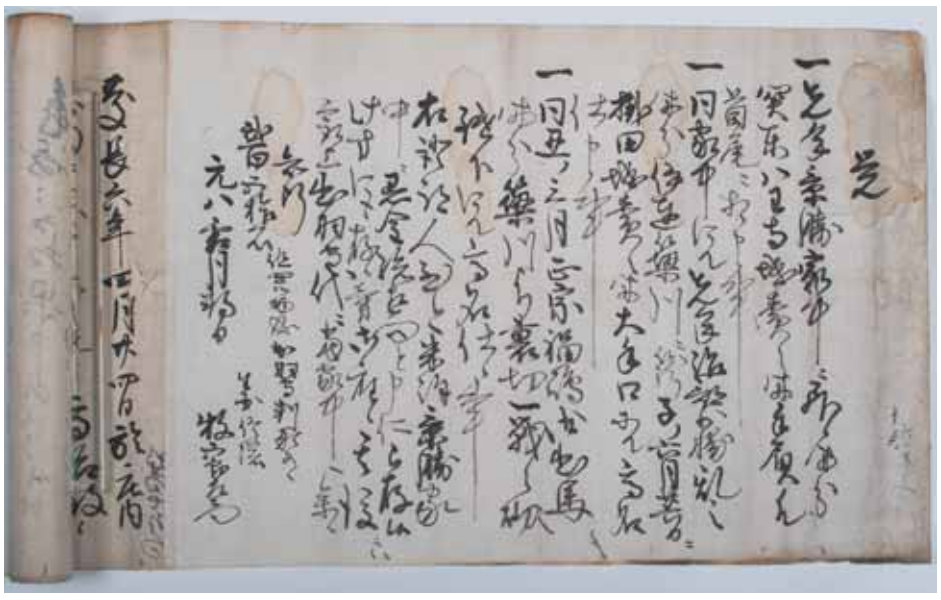
本丸御殿が完成するまでの間、忠勝は仮御殿として建てた高畑御殿（御花畑御殿ともいう。鶴岡市上畑町の旧NHK鶴岡支局付近）に数年間居住しました。この建物は、後に菩提寺の大督寺や藤島本陣（藩主の参勤交代の際の休憩所。明治院を郭外に配置するなど現在に通じる鶴岡の町並みを形成していきました。

入部した翌月には、新たに家臣を募っています。信濃国松代10万石から3万8000石が加増されたためです。諸国の浪人たちが仕官を望んだようですが、特に多いのは旧最上家家臣たちでした。彼らは自らの出生地や戦国時代の合戦で活躍した事績を書き出した「戦功覚書」を提出し、仕官を望みました（写真①参照）。

元和9（1623）年には、領内の総検地を行っています。最上家時代の新田開発などがあり、約5万石の出目（増石分）が生じ、内高（実際の生産高）18万石余となりました。そのため、忠勝は幕府に20万石相当の軍役を願い出て、家格（家柄）を上げようとしましたが、それは叶いませんでした。

（致道博物館学芸部長・本間豊）

鶴岡市指定文化財 鶴ヶ岡城襖絵「桐図」（江戸時代 個人蔵）。この襖絵は狩野派の手によるもので、金箔濃彩を施した豪壮華麗な画風は、大名の威容と格式をよく表現している。現在このような軸装の襖絵が7幅残っている



【写真①】「戦功覚書」（江戸時代初期）